

かねだ けいこ

氏 名 金田 啓子  
学 位 博 士 ( 学 術 )  
学 位 記 番 号 新大院博 (学) 第 45 号  
学位授与の日付 平成 17 年 3 月 23 日  
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当  
博 士 論 文 名 野口雨情の教育観と作品の研究

論文審査委員 主 査 教授 齋藤 勉  
副 査 教授 井上正志  
副 査 教授 清田文武

#### 博士論文の要旨

本論文は、野口雨情 (1882-1945) の教育観を明らかにして、それが作品とどのような形になっているかを論究したものである。

「童謡」は、子どもたちのための歌で、「唱歌」を批判するものとして生まれたものである。童謡・童話運動は、一般に 1918 年に始まるとされ、三大童話作家の一人として野口雨情が位置付けられている。著者は、この野口雨情の位置付けを前提としたうえで、先行研究を批判的に検討して「童心主義 (純真・天真・無垢・反俗)」の新しい捉えを明らかにしている。先行研究では、野口雨情の童謡を「大衆的」であるとか、「詩的価値が低い」としているのに対して、本論文では、「理知教育」批判から生じた「国民としての全人教育」のためのものであるとしている。そして、野口雨情の教育観についての本格的な研究は、日本において始めてのものである。

作品の研究は、教育観との関連で四つの作品「四丁目の犬」「十五夜お月さん」「青い眼の人形」「七つの子」が検討され、視点の移動と、大人の見地と子どもの見地の融合という特質を取り出すことに成功している。

この論文の構成は、六つの章と参考資料から成っており、日本において始めての野口雨情の教育観についての研究である。

## 審査結果の要旨

本論文は、野口雨情の教育観と童謡作品を研究したものである。

本論文の研究成果は、以下の四点にまとめられる。

第一に、三大童謡作家である北原白秋、西條八十、野口雨情の童謡論を対比することで、野口雨情の童謡論の特長を明らかにしている。

第二に、野口雨情の童謡論に関する先行研究を批判的に検討することで、先行研究の「童心主義」の捉え方に問題があることを論じている。先行研究では大人の中にも童心があるとしているのに対し、本論文では大人の世界と子どもの世界が別であるとしたうえで、子どもの童心を大人がコントロールしなければならないとしている。

第三に、野口雨情の童謡論は、大正 11 年（1922）を境目に転換していることを明示している。その理由として、教育講演、路上演奏、小学校教育とのかかわりを指摘している。また、横瀬夜雨との「夕焼論争」を調査することで、芸術教育対感情教育、読み味わうべきか対歌うべきかという論点を取り出し、野口雨情の童謡論が後者であることを明らかにしている。また、この論争にかかわる未刊行の資料も収集して論究した点は、高く評価することができる。

第四に、野口雨情の四つの童謡作品「四丁目の犬」「十五夜お月さん」「青い眼の人形」「七つの子」を検討することで、視点の移動と、大人の見地と子どもの見地の融合という二つの特質を明らかにしている。この童謡が教材となることで、教師と子どもの新しい関係性が生じることを論じている。

本論文は、以上のような優れた点を持つ半面、野口雨情の使う「国」や「描写」の意味をもっと深める言及があるなら、さらに内容が豊かになると思われる。また、童謡・童話運動によって「唱歌」がどのように変化し、こんにちの学校教育の「表現」領域につながっているのかも明らかにする必要がある。

以上により、本論文は博士（学術）の学位を授与するに適格なものであると判定した。